遊技場増築・立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

三　口　遺　跡
広畑地区

中津市文化財調査報告　第61集

2013

中津市教育委員会

序　文

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の薫りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての側面を見せはじめています。

一方、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ影響を与えていることも事実です。今年度は農産物販売所建設や個人住宅建設に伴う本発掘調査を行いました。また、各種開発事業に伴う試掘・確認調査件数はここ数年減少することなく高止まりしたまま推移しています。今後、東九州道などへのアクセス道路、インター周辺の開発、個人住宅の建設等が予想されるため、埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは続くことが予想されます。しかし、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市大字相原における遊技場増築・立体駐車場建設工事に伴い、中津市教育委員会が調査した三口遺跡の発掘調査報告書です。調査により９世紀代の遺構・遺物などが発見され、当時の集落景観を考える上で貴重な資料となりました。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、佐々木食品工業株式会社様をはじめ発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました関係各位、及び、調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

平成25年3月31日

中津市教育委員会
教育長　廣　畑　　功

例　言

1．　本書は中津市教育委員会が2011年度に行った大分県中津市大字相原に所在する中津サミット相原店の店舗増築工事・立体駐車場建設に伴う三口遺跡広畑地区の発掘調査事業の報告書である。

2．　確認調査は平成23年9月15日、9月22日に行い、本調査は平成23年10月4日～19日まで実施した。報告書作成作業は平成24年度に行った。

3．　確認調査・本調査は浦井直幸が担当した。

4．　現場で用いた座標は世界測地系による。

5．　遺構の実測・撮影は浦井が行った。発掘作業は下記の方々の協力を得た。
石塔美代子　今永夏樹　岩本慶子　植山加奈江　大江由美子　小川禮子　加来田泰明
黒瀬昭一　新開初美　末廣洋子　巣野典子　瀬口礼子　高榎俊幸　田島律子　田中雅恵
寺本利子　久恒義生　藤野初音　松本浩司　宮津しのぶ（50音順、敬称略）

6．　遺物の実測・撮影・浄書は、雅企画㈱に委託し、一部浦井が行った。その他の遺物整理・浄書は下記の方々の協力を得た。
浅田くるみ　岩﨑弘子　小野のり子　門脇和恵　金丸孝子　高野ツギ子　武吉久美子
土橋厚子　古市智子（50音順、敬称略）

7．　図面等記録類、出土遺物は中津市歴史民俗資料館にて保管している。

8．　本書で使用した土師器の属性・年代などは以下の文献による。
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『弥勒寺』1989
坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』2001

9．　報告書作成にあたっては下記の方にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。
塩地潤一（大分市教育委員会）（敬称略）

10．　本書の執筆・編集は浦井が行った。

目　　次

序文
例言

第１章　調査の経過 …… 1
　　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　第２節　調査体制 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　　第１節　地理的環境 …… 2
　　第２節　歴史的環境 …… 2
　　第３節　これまでの調査 …… 4

第３章　調査の方法と成果 …… 5
　　第１節　調査の方法 …… 5
　　第２節　調査の成果 …… 5

第４章　総括 …… 16
　　第１節　出土遺物について …… 16
　　第２節　遺構について …… 16

写真図版 …… 19
報告書抄録 …… 23

挿　図　目　次

第１図　中津市内主要遺跡分布図 …… 3
第２図　調査区と周辺の様子 …… 4
第３図　A区遺構配置図 …… 5
第４図　SK-1平面図・土層図 …… 6
第５図　SK-1出土遺物 …… 6
第６図　SK-2土層図 …… 7
第７図　SK-2出土遺物 …… 7
第８図　S-1平面図・土層図 …… 8
第９図　S-1出土遺物 …… 8
第10図　S-2平面図・断面図 …… 8
第11図　柱穴状遺構出土遺物 …… 9
第12図　A区出土遺物 …… 10
第13図　A区出土遺物 …… 11
第14図　B区遺構配置図・土層図 …… 12
第15図　S-1断面図 …… 12
第16図　B区出土遺物 …… 12

表　目　次

第１表　遺物観察表１　土器・瓦 …… 13
第２表　遺物観察表２　石製品 …… 15

写真図版目次

写真図版１　A区調査区全景　SK-1完掘状況　SK-2土層
S-1完掘状況　S-2完掘状況 …… 19
写真図版２　B区調査区全景　南壁土層　S-2完掘状況 …… 20
写真図版３　出土遺物 …… 21
写真図版４　出土遺物 …… 22

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

平成23年９月９日、中津市大字相原3334番他の遊技施設駐車場にて立体駐車場建設工事が行われていることを視認した。既に建物基礎となる柱状改良工事が進められており、約2,000㎡の範囲に約5㎡のコンクリート基礎が数メートルピッチで40基程度表出していた。現場は三口遺跡内に所在することから早急に文化財保護法93条の提出を依頼した。協議の中で、工事内容は既存駐車場の立体駐車場への建替えと既存店舗東側への店舗増築であるとの説明を受けた。９月15日、立体駐車場部分の確認調査を行った。調査の結果、地表面から1.8m下位で、柱穴４基、古代のものと思われる土師皿を検出した。９月22日には増築部分の確認調査を行い、同じく1.8m下位にて時期不明の柱穴や土坑状の遺構を確認した。

このように工事対象地地下には濃密に遺構が存在することが明らかとなったため、工事主体者と工法変更の協議を行った。協議の結果、基礎工事がほぼ終了している立体駐車場部分については、基礎の間に細長い調査区を設定し本調査することが決まった。これは将来的に建物基礎が撤去される工事が行われた際に、地下の埋蔵文化財への影響は避けられないとの判断による。増築部分は、工法変更の措置が採られることとなったため本調査の対象から除外し、大型の合併浄化槽が設置される範囲のみ本調査を実施することとした。

工事主体者である佐々木食品工業株式会社と発掘調査委託契約を締結し、平成23年10月４日から10月11日まで立体駐車場部分の発掘調査を行った。終了後、引き続き浄化槽部の調査を10月19日まで行った。

第２節　調査体制

平成23年度の体制は下記のとおり。（本発掘調査）

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	北山　一彦（中津市教育委員会教育長）		
調査事務	藤原　義郎（	同	文化振興課長）
	田中布由彦（	同	文化財係長）
	平田　由美（	同	文化財係員）
担　　当	浦井　直幸（	同	文化財係員）

平成24年度の体制は下記のとおり。（整理・報告書刊行）

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	廣畑　　功（中津市教育委員会教育長）		
調査事務	藤原　義郎（	同	文化振興課長）
	田中布由彦（	同	文化振興課参事）
	高崎　章子（	同	文化財係長）
	平田　由美（	同	文化財係員）
担　　当	浦井　直幸（	同	文化財係員）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約８万６千人、面積491km²を誇り、北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と接する。英彦山に源を発する一級河川山国川は市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬渓として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

三口遺跡は、山国川右岸の標高16mの自然堤防上に位置する。この地点は、下毛原台地と山国川の接点にあたり、現在、山国川大井手堰からの揚水が沖代平野に向けて３方へ通水している。この付近の「三口」地名もその辺りに由来するものであろう。

第２節　歴史的環境

市内の遺跡を概観すると旧石器時代の石器は才木遺跡（35）や法垣遺跡（前：大坪遺跡）（19）で発見されている。縄文時代は上畑成遺跡（43）で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見されている。遺跡数は縄文後期から増大する。貝塚は植野貝塚やボウガキ遺跡（21）、集落は女体を模した土偶が出土した高畑遺跡（5）が挙げられる。法垣遺跡では複数の掘立柱建物跡が検出され注目されている。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認される。続く中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡（28）で検出された。古墳時代の遺跡としては亀山（亀塚）古墳（58）が挙げられるが、明治時代に調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。５世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、５世紀後半から７世紀前半にかけては上ノ原横穴墓群（11）が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群（29）、城山古墳群（34）、城山横穴墓群（33）などが見られる。また、７世紀から９世紀にかけて相原山首遺跡（7）で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡（45）や定留遺跡（47）でまとまって発見されている。

古代には寺院遺跡として、７世紀末に白鳳系の相原廃寺（6）が建立される。また、遅くとも８世紀初頭には沖代平野に条里制（4）が施行されたと考えられ、条里の南限には「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。８世紀後半にはその官道に沿う地に下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡（20）が確認された。また、諸田南遺跡（44）で掘立柱建物群や円面硯が検出されている。須恵器や瓦を製作した生産遺跡は、踊ヶ迫窯跡（38）、草場窯跡（37）、洞ノ上窯跡（31）などがある。

中世は、長久寺の田丸城跡（24）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世は関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632（寛永９）年に完成を見る（2）。1717（享保２）年、奥平氏が入部し1871（明治４）年の廃藩置県まで統治した。

1. 中津城
2. 中津城下町遺跡
3. 豊田小学校校庭遺跡
4. 沖代地区条里跡
5. 高畑遺跡
6. 相原廃寺
7. 相原山首遺跡
8. 鶴市神社裏山古墳
9. 坂手隈城跡
10. 幣旗邸古墳群
11. 上ノ原横穴墓群
12. 勘助野地遺跡
13. 上ノ原平原遺跡
14. 大池南遺跡
15. 佐知久保畑遺跡
16. 佐知遺跡
17. 加来居屋敷遺跡
18. 黒水遺跡
19. 法垣遺跡
20. 長者屋敷官衙遺跡
21. ボウガキ遺跡
22. 大悟法地区条里跡
23. 原遺跡
24. 田丸城跡
25. 福島遺跡
26. 福島地下式横穴
27. 前田遺跡
28. 森山遺跡
29. 岩井崎横穴墓群
30. 犬丸川流域遺跡
31. 洞ノ上窯跡
32. 安平遺跡
33. 城山横穴墓群
34. 城山古墳群
35. 才木遺跡
36. 城山窯跡群
37. 草場窯跡
38. 踊ヶ迫窯跡
39. ホヤ池窯跡
40. 大谷窯跡
41. 野依遺跡
42. 野依地区条里跡
43. 上畑成遺跡
44. 諸田南遺跡
45. 諸田遺跡
46. 天貝川遺跡
47. 定留遺跡
48. 定留貝塚
49. 和間貝塚
50. 定留鬼塚遺跡
51. 是能遺跡
52. 田尻大迫遺跡
53. 舞手橋東段上遺跡
54. 是則遺跡
55. 全徳遺跡
56. ガラヌノ遺跡
57. 合馬遺跡
58. 亀山古墳
59. 東浜遺跡
60. 三口遺跡

第１図　中津市内主要遺跡分布図（S＝1/50,000）

第３節　これまでの調査（第２図）

三口遺跡は、弥生時代・古墳時代・古代の集落遺跡として周知される。遺跡の北側は７世紀末の建立と想定されている県指定史跡相原廃寺がある。原位置を保つ遺構は、２個の礎石とそれを支える基壇のみであるが、貴船神社境内などに礎石が転用され、瑞福寺に塔心礎が移されている。遺跡南側の台地上には県指定史跡相原山首遺跡があり、古墳時代から中世にかけて円墳や方墳、土壙墓などが構築される。

三口遺跡内では、1993年度に市道建設工事に伴う発掘調査において、６世紀、８～10世紀代の竪穴住居７棟、掘立柱建物８棟、溝状遺構などが検出されている。遺構からは墨書土器も出土している。1997年度の農道建設工事に伴う発掘調査では、竪穴住居１棟や掘立柱建物１棟が検出されている。

このように三口遺跡周辺は、古墳時代・古代の遺構が濃密に広がる重要地域として認識されてきた。今回の発掘調査では、土坑２基や溝状遺構、複数の性格不明遺構を検出した。遺物は８世紀末から９世紀中頃の古代のものが大半を占め、弥生土器や瓦質土器などは少数であった。

第２図　調査区と周辺の様子（S=1/5,000）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

本発掘調査は、立体駐車場建設範囲と大型合併浄化槽設置範囲の２か所を対象とした。立体駐車場建設範囲は、すでに基礎が数メートルピッチで施工されており、この部分の発掘調査は不可能な状況にあった。そこで、今回の工事では掘削を受けないものの基礎と基礎との間に細長い調査区を設定し、本調査を行うこととした。この部分を今回はA区として報告する。

大型合併浄化槽設置範囲は、その範囲全てを遺構面まで検出し発掘調査を実施した。今回の報告ではB区として取り扱う。

調査はA区から着手し、終了後即日B区へ移行し約２週間程度で調査を終了した。短期で調査を終了できたことは、作業員並びに雨天の中表土剝ぎに協力してくれた工事現場重機オペレーターの援助によるところが大きい。

以下、A区から順に報告を行う。

第２節　調査の成果

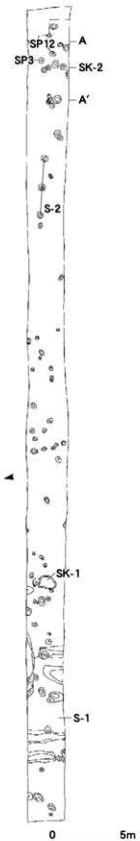
A区

１）層序（第６図）

調査区は、表土を除去すると２層である暗茶褐色砂質土に至る。しまりは良く、土器粒を多量に内包している。続く３層は２層と明確に分かれるものではないがやや２層より暗い。この層を除去するとクロボク状の黒褐色砂質土の７層に至る。遺構は、この層から構築されていると考えられるが、いわゆる黒に黒が掘り込まれている状態であり、遺構検出には精査を要する。７層下位は８層の暗茶褐色砂質土であり、この面で遺構検出が容易になる。その下は黄褐色砂質土のローム層に至る。今回の調査では、８層上面で確認した遺構の精査に主眼を置き、一部黄褐色砂質土まで掘り下げて遺構検出を行った。

２）A区の遺構と遺物（第４～ 13図）

遺構は調査区のほぼ全面から検出した。遺構種別にみると西端に溝状遺構が多く、他は柱穴状遺構が主体で一部に土坑が認められる。検出した遺構は、土坑２基、溝状遺構４条、性格不明遺構、柱穴状遺構である。遺物の時期は、弥生時代後期、古



第３図　A区遺構配置図（S=1/250）

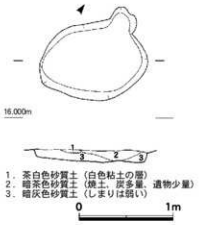
墳時代後期、８世紀末～９世紀中頃のものを主体とする。調査面積は約142㎡で、遺物の数量はパンケース２箱分であった。

土坑

SK-1（第４図）

調査区中央西よりに位置する。最大長116㎝、最大幅104㎝、深さ12㎝を測る。楕円形を呈し、北側で袋状の膨らみを有する。埋土は上層に一部白色の粘土を含む。他は暗茶色砂質土、暗灰色砂質土からなる。堆積状況から粘土層以外は自然堆積によるものと考える。

遺物は少量出土している。１は須恵器の甕胴部の下半部。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。同心円の幅は広い。古墳時代後期か。

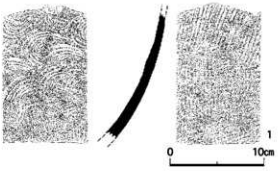


第４図　SK-1 平面図・土層図（S=1/40）

SK-2（第６・７図）

調査区東よりに位置する。７層上面で検出できた遺構であるが、表土剝ぎの時点で確認することができず土層でその存在を確認した。最大長260㎝、深さ32㎝を測る。埋土は、基本的に黒褐色砂質土が堆積する。黄褐色ブロックが少量混入することから短期間での人為的埋没を想定する。上層には２～５など多量の土器の包含を見る。表土剝ぎの際、第12図25～34などの土器もSK-2付近から出土している。

２は土師器蓋。水平の天井部から強い屈曲をもち口縁部へ至る。端部はやや丸く肥厚する。天井部は回転ヘラ切り後ナデを行い、口縁部は回転台を利用したヨコナデ、回転ヘラミガキを施す。内面はヨコナデ後一部ミガキを施す。９世紀前半～中頃か。



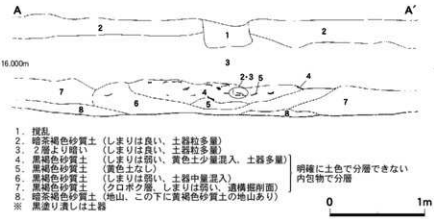
第５図　SK-1 出土遺物（S=1/4）

３・４は土師器坏。３の体部はやや内湾しながら立ち上がり、端部は丸みをもつ。内外面共に回転台を利用したヨコナデ後、回転ヘラミガキを施す。ミガキはミガキ間に空隙を有するものである。今回出土した土師器蓋や坏に見られるミガキは全てこの手法を採用している。８世紀末～９世紀初頭か。４の体部は直線的に延び、端部はやや外反し水平に仕上げる。内外面共に回転台を利用したヨコナデ後、回転ヘラミガキを施す。８世紀末～９世紀初頭か。５は土師器甕。如意状に外反する口縁部は内外面共に丁寧なヨコナデを施す。胴部は肩が張らず、最大径は口縁部にある。外面はハケ目後ナデで仕上げ、内面は指オサエや指ナデが明瞭に残る。

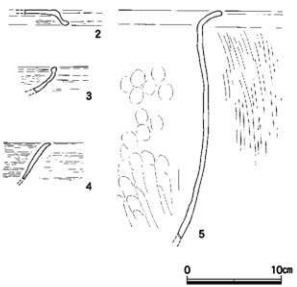
性格不明遺構

S-1（第８・９図）

調査区西部に位置する。最大幅625㎝、深さ60㎝を測る。遺構の西側の肩はやや強い角度で立ち上がり、底面中央付近は所々凹凸が認められる。埋土は、クロボク層が一部認められるが、基本的に黄褐色ブロックが混入する黒褐色砂質土で構成されており、ある時期一括して埋め戻されたと推察しうる。遺構は、溝状遺構として取り扱うことも可能であったが、全体プランが不明瞭なため性格不明遺構として報告する。一方、遺構東側の調査区北壁付近には、遺構の肩を切るような落ち込みが認められる。何らかの遺構が存在した可能性があるが、遺構の新旧関係などは判然としなかった。また、遺構東側の肩は後出する土坑によって切られている。よって、S-1周辺は複数時期にわたる土地利用がなされたものと推察する。



第６図　SK-2 土層図（S=1/40）



第７図　SK-2 出土遺物（S=1/4）

６は壺で、胴部に断面方形の突帯を貼り付ける。７は短頸壺。口縁部は「く」の字状に強く屈曲し、端部は方形を呈する。上面はわずかに窪む。６・７共に内面にハケ目調整を施す。弥生時代後期か。８は須恵器で提瓶か平瓶の口縁部。体部は直線的に延び、端部は内湾する。９は土師器の甕。口縁部は強く屈曲する。

出土遺物数量が少ないため遺構の帰属時期は明確ではない。

S-2（第10図）

調査区東よりに位置する。直径約40㎝、芯々距離間180㎝の柱穴３基を検出した。掘立柱建物の梁行を検出したものと考えられ、長さ380㎝を測る。建物の展開方向は調査区の制限を受け判然としない。また、遺物も出土していないため遺構の帰属時期は不明である。

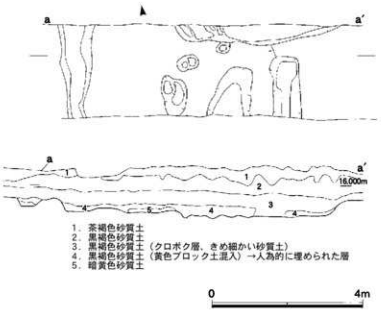
柱穴状遺構出土遺物（第３・11図）

10・11はSP-3出土遺物。10は須恵器坏蓋口縁部。体部と口縁部の境に段を有する。11は須恵器坏身口縁部。端部立ち上がりは内傾し、受け部は上外方に延びる。12はSP-12出土遺物で須恵器柑。胴部に最大径をもち、口縁部は如意状に延びる。

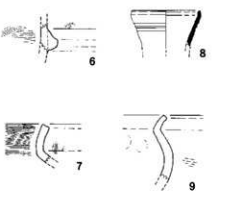
調査区内出土遺物（第12・13図）

表土剥ぎの際、弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器など複数時期・多種の遺物が出土した。須恵器類は、調査区東端のSP-3・12付近で出土し、土師器類はSK-2付近でまとまって出土している。特に土師器類はその形態属性から元々SK-2に内包されていたと考えられるが、表土剥ぎの時点でSK-2の存在に気付かず、掘削に伴い一括遺物として取り上げた可能性が高い。

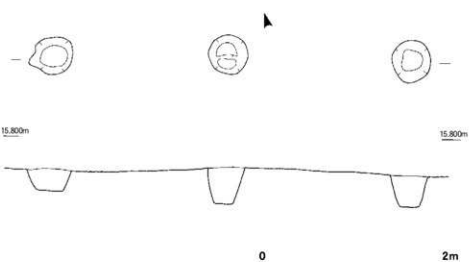
13は壺の胴部。断面三角形の突帯を貼り付ける。内面はハケ目調整を施す。14は壺の肩部。断面三角形の低い突帯を貼り付ける。15は二重口縁壺の口縁部。「く」の字状に立ち上がりを見せる。いずれも弥生時代後期の所産と考える。16～23は須恵器。16は坏蓋で天井部は水平に仕上げ、口縁部はS字状に垂下する。9世紀前半～中頃。17・18は坏身。直線的に立ち上がり端部はやや尖る。受け部は上外方に延びる。田辺編年TK209、7世紀初頭の資料。19は埦。高台は断面逆台形で底部外面よりにつく。8世紀中頃～後半。20は提瓶か横瓶の胴部。内面に上下をつなぐ接合痕がある。21は甕。外面はタタキ後カキ目を施し、内面は同心円当て具痕が残る。22は鉢か。体部中位に段を有する。23は脚付の直口壺か。体部と底部の境は不明瞭で脚は下外方に付く。端部は段を有し方形を呈する。内面に灰かぶりの痕がある。24は須恵質の丸瓦。破面は凸面側にある。外面は端部に斜位のヘラケズリを施し、ナデで仕上げる。内面は布目痕が残る。25～39は土師器。25・26は坏蓋で、天井部は回転ヘラ切り離し後ナデ、口縁部は外反しながら垂下する。



第8図　S-1 平面図・土層図（S=1/100）

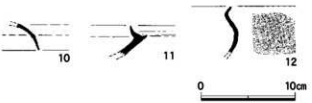


第9図　S-1 出土遺物（S=1/4）



第10図　S-2 平面図・断面図（S=1/40）

26も天井部は回転ヘラ切り離し後ナデを施し平らに仕上げる。口縁部はS字状に屈曲し端部は水平面をもつ。内外面共に回転台を利用したヨコナデ後、回転ヘラミガキを施す。27～34は坏身。27は逆三角形状の高台が底部外縁に付く。外面下部は回転ヘラ削り後、丁寧な回転ヘラミガキを施し、底部は回転ヘラ切り後回転ヘラミガキを施す。内面はヨコナデ後、回転ヘラミガキで仕上げる。ミガキ間には2ミリ程度の空隙を有する。色調は橙色。28は内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸みをもつ。調整は内外面共に27と同じだが、ミガキ間の空隙は2～3ミリである。色調は橙色。8世紀後半～末の資料か。29は底部と胴部の境は回転ヘラ削り後、回転ヘラミガキを施す。底部と体部の境はやや不明瞭な仕上がりとなる。調整は27・28と基本的に同じで、底部のミガキは非常に丁寧で空隙を有さない。外面胴部ミガキ間の空隙は2ミリ、口縁部は6ミリ程度を有している。いわゆる坏dと呼ばれる土器の属性を有する。8世紀末～9世紀初頭か。30は回転台を利用したヨコナデを胴部内外面に施す。底部は回転ヘラ切り後、雑にナデを施す。31は胴部外面上位は回転台利用のヨコナデ後、回転ヘラミガキを用いる。下半は回転ヘラケズリ後、回転ヘラミガキを施す。内面はヨコナデ後、回転ヘラミガキを施す。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラミガキを施す。ミガキ間の空隙は2～3ミリ程度である。32・33の胴部外面は回転台を利用したヨコナデとし、底部は回転ヘラ切り離し後、ナデを施す。32の内面は一部に回転ヘラミガキの痕跡がある。33は口縁部外面に回転ヘラミガキを施す。34は内外面を回転台を利用したヨコナデで仕上げる。底部は回転ヘラ切り後、不定ナデで仕上げる。内面に回転ヘラミガキの痕跡が認められず、他の部位は32などの調整と同じである。30～34は9世紀前半～中頃の資料。35は土師器の高坏。内外面はヨコナデを施す。36は土師器甕の底部。外面はナデや手持ちヘラケズリで整える。37～39は土師器。37は甕または甑の口縁部か。体部は直線的に延び、肥厚する口縁部内面はやや外反する。口縁部内外面は回転ヨコナデの痕跡が明瞭に残る。体部内面は不定方向の手持ちヘラケズリで仕上げる。38・39は甕で、38の口縁部は強く外反し、端部は方形を呈する。端部上面はやや窪む。胴部はあまり張らず垂下する。口縁部は37同様回転ヨコナデで仕上げる。39は強く外反する口縁部をもち、胴部はあまり張らずに垂下する。口縁部内外面は回転ヨコナデで仕上げる。40は瓦質土器で鍋の口縁部。直線的に延びる体部から口縁部はわずかに外反し、内面は窪みをもつ。端部は丸みを呈する。41は磨り石。上面に使用痕跡、側面は整形のための敲打痕が残る。

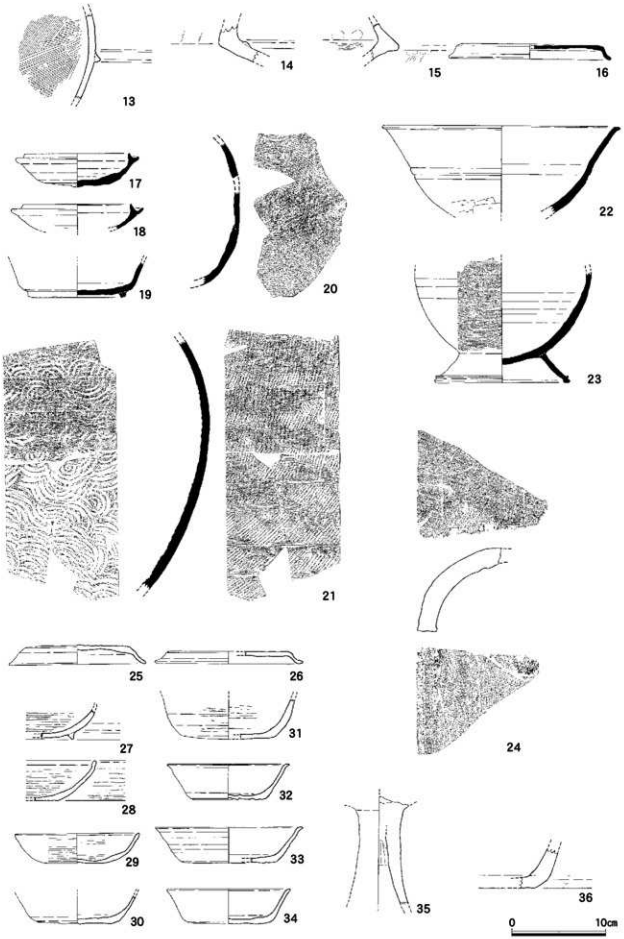


第11図　柱穴状遺構出土遺物（S=1/4）

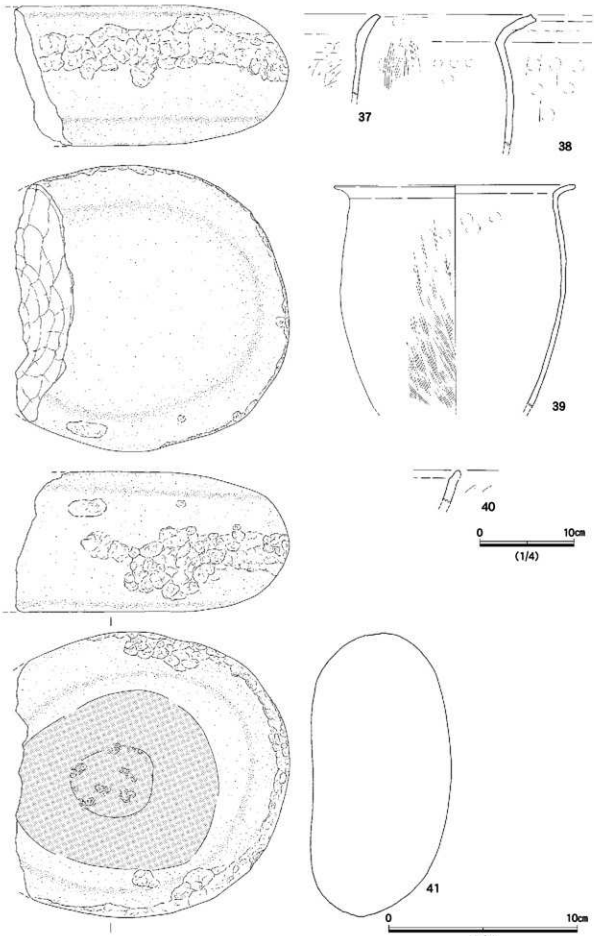
B区

1）層序（第14図）

調査前B区は遊技場の駐車場として利用されていた。そのためアスファルトを除去すると真砂土の造成土が表れる。その下は水田由来の層位が認められ、A区で観察された土器粒を含む5層に至る。11層は黒褐色のクロボク層であり、S-2はこの層から構築される。



第12図　A区出土遺物（S=1/4）



第13図　A区出土遺物（S=1/4、1/2）

2）B区の遺構と遺物

（第14～16図）

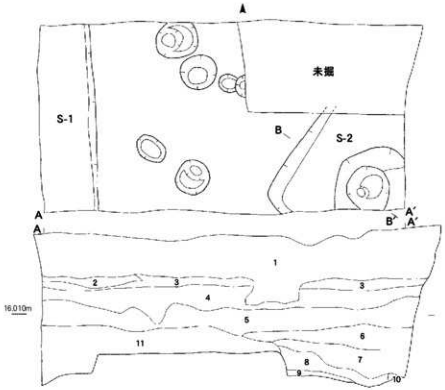
遺構は調査区のほぼ全面から検出した。柱穴状遺構、性格不明遺構である。出土遺物は少なく各遺構の時期認定には至っていない。調査面積は約12㎡で、遺物の数量はビニール袋1袋分であった。

性格不明遺構

（第14・15図）

S-1

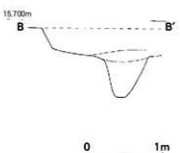
調査区西端に位置する。南北長250㎝を測る。東側の立ち上がりのみ検出しており、西側については調査区外のため全形は不明である。埋土は11層のクロボク層が堆積していた。壁は強い角度で立ち上がり、床面は平端面からなだらかに降下する。遺物は出土しておらず時期は不明である。



第14図　B区遺構配置図・土層図（S=1/50）

S-2

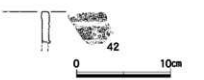
調査区東端に位置する。遺構の西側肩部分を検出しており方形を指向した角をもつ。立ち上がりは急で、床面に長軸55㎝＋αを測る大型の柱穴状遺構を構築する。竪穴住居跡とも考えられるが、調査区の制限を受けるため詳細は不明。遺物は出土しておらず遺構の時期は判然としない。ただし、A区SK-2同様クロボク層から構築されており、古代の遺構の可能性もある。



第15図　S-1 断面図（S=1/50）

調査区内出土遺物（第16図）

42は表土剥ぎの際に検出した遺物で、瓦質土器火鉢の口縁部。口縁部は垂直に立ち上がり端部は方形を呈する。外面は巴紋のスタンプを打つ。16世紀代の所産。



第16図　B区出土遺物（S=1/4）

第１表　遺物観察表１　土器・瓦　単位：cm

遺物No.	遺構番号	種別・器種	法量			器形	調整・成形	焼成	胎土	色調	備考	挿図No.
			口径・底径	器高								
1	SK-1	須恵器・甕		(13.5)		底部付近はやや厚くなる。	(外面)　平行タタキ (内面)　同心円状当て具痕	良好	白色粒・黒色粒	灰色		5
2	SK-2	土師器・蓋		1.6		天井部は平坦で口縁部は外反する。	(外面)　回転ヨコナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　ヨコナデ後一部ミガキ	良好	長石・角閃石	橙色		7
3	SK-2	土師器・坏		(2.7)		口縁部は内湾し、端部は肥厚する。	回転ヨコナデ後回転ヘラミガキ	良好	角閃石・長石	橙色		7
4	SK-2	土師器・坏		(4.0)		端部水平。	回転ヨコナデ後回転ヘラミガキ	良好	角閃石・長石	橙色		7
5	SK-2	土師器・甕		(24.2)		口縁部は如意状に外反し、胴部は張らない。	(外面)　回転ヨコナデ・ハケ目・ナデ (内面)　回転ヨコナデ・指オサエ・指ナデ	良好	角閃石・長石	にぶい褐色		7
6	S-1	弥生土器・壺		(3.3)		胴部の突帯は方形。	(外面)　ハケ目・ヨコナデ・貼付突帯 (内面)　ハケ目	良好	角閃石・長石・白色粒・赤色粒	(外面)　にぶい黄橙色 (内面)　橙色		9
7	S-1	弥生土器・短頸壺		(4.1)		口縁部はく字状に外反する。	(外面)　ヨコナデ・ハケ目 (内面)　ハケ目・ナデ	良好	長石・角閃石・白色粒	明褐色		9
8	S-1	須恵器	(7.2)	(4.1)		口縁部はわずかに内湾する。	(外面)　回転ナデ・沈線 (内面)　回転ナデ	やや不良	白色粒・黒色粒	(外面)　にぶい赤褐色 (内面)　灰褐色		9
9	S-1	土師器・甕		(7.2)		口縁部はく字状に外反する。	(外面)　ヨコナデ・ハケ目後ナデ (内面)　ヨコナデ・指オサエ後ナデ	良好	角閃石・長石	明赤褐色		9
10	柱穴	須恵器・坏蓋		(2.9)		胴部と口縁部の境で屈曲をもつ。	(外面)　回転ヘラケズリ・回転ナデ (内面)　ナデ・回転ナデ	良好	黒色粒・白色粒	灰色		11
11	柱穴	須恵器・坏身		(3.2)		立ち上がりは内傾し、受け部は上外方に延びる。	回転ナデ	やや不良	長石・黒色粒	浅黄色		11
12	柱穴	須恵器・椀		(5.0)		丸みを持つ胴部に如意状の口縁部が付く。	(外面)　ヨコナデ・カキ目 (内面)　ヨコナデ	良好	黒色粒・白色粒	暗灰色		11
13	A区一括	弥生土器・壺		(9.2)		胴部に三角形状の突帯を貼り付ける。	(外面)　ハケ目後ナデ・ヨコナデ・貼付突帯 (内面)　ハケ目(後一部ナデ)	良好	長石・角閃石・石英	にぶい黄橙色		12
14	A区一括	弥生土器・壺		(4.2)		口縁部は上方に延びる。	(外面)　ヨコナデ・貼付突帯 (内面)　ヨコナデ(工具痕)・ナデ	良好	長石・角閃石・石英	にぶい黄橙色		12
15	A区一括	弥生土器・壺		(4.1)		口縁部は内傾気味に延びる。	(外面)　ヨコナデ・指オサエ・ハケ目後ナデ (内面)　指オサエ後ナデ・ハケ目	良好	長石・角閃石・白色粒	にぶい黄橙色		12
16	A区一括	須恵器・蓋	(16.9) (15.6)	1.6		天井部は平坦で口縁部は外反する。	(外面)　回転ナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	白色粒・黒色粒	灰色		12
17	A区一括	須恵器・坏身	11.0	3.6		立ち上がりは垂直気味で、受け部は上外方に延びる。底部はほぼ平坦である。	(外面)　回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	白色粒	灰黄色		12
18	A区一括	須恵器・坏身	(11.4)	(2.7)		立ち上がりはやや内傾する。受け部は上外方へ延びる。	(外面)　回転ナデ・回転ヘラケズリ (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	白色粒	灰褐色		12
19	A区一括	須恵器・瓶	(10.3)	(3.8)		高台は底部外縁に付き方形をなす。	(外面)　回転ナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	白色粒・黒色粒	灰色		12
20	A区一括	須恵器・提瓶?		(15.2)		胴部中央内面に上下をつなぐ接合痕あり。	(外面)　カキ目 (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	黒色粒・白色粒	(外面)　灰色 (内面)　暗灰黄色		12
21	A区一括	須恵器・甕		(26.4)		胴部はやや丸みを持つ。	(外面)　タタキ後カキ目 (内面)　同心円状当て具痕後一部ヨコナデ	やや不良	黒色粒・白色粒	灰黄色		12

遺物No.	遺構番号	種別・器種	法量		器形	調整・成形	焼成	胎土	色調	備考	挿図No.
			口径・底径	器高							
22	AⅠ区一括	須恵器	(24.5)	(9.3)	外面に段を有し、口縁部はわずかに外反する。	(外面)　回転ナデ・手持ちヘラケズリ (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	黒色粒・白色粒	赤褐色	内面に付着物	12
23	AⅠ区一括	須恵器	(14.3)	(11.7)	脚部は外反し接地する。胴部は内湾しながら口縁部へ向かう。	(外面)　カキ目・回転ナデ (内面)　回転ナデ・ナデ	良好	黒色粒・白色粒	(外面)　黒褐色 (内面)　灰色		12
24	AⅠ区一括	瓦・丸瓦		厚さ 1.9	破面は凸面側にあり。	(外面)　ヘラケズリ後縦なナデ (内面)　布目痕・ナデ・未調整	良好	長石・角閃石	灰色		12
25	AⅠ区一括	土師器・蓋	(14.2) (11.0)	2.1	天井部は平らで、口縁部はわずかに外反する。	(外面)　回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　ナデ	良好	角閃石・長石・白色粒	橙色		12
26	AⅠ区一括	土師器・蓋	(14.5) (13.2)	1.3	天井部は平らで、端部は短く外反する。	(外面)　回転ヘラ切り離し後ナデ・回転ヨコナデ後回転ヘラミガキ (内面)　回転ヨコナデ後回転ヘラミガキ	良好	角閃石・長石・赤色粒	橙色		12
27	AⅠ区一括	土師器・坏		(3.3)	逆三角形上の高台が底部外縁に付く。	(外面)　回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ (内面)　回転ヘラミガキ	良好	長石・角閃石	橙色		12
28	AⅠ区一括	土師器・坏		(4.3)	内湾気味に立ち上がり、端部は丸みを持つ。	(外面)回転ヘラミガキ・回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ (内面)　回転ヘラミガキ	良好	長石・角閃石	橙色		12
29	AⅠ区一括	土師器・坏	(13.0) 6.3	3.2	底部と胴部の境は不明瞭。	(外面)　回転ヘラミガキ・回転ヘラ切り離し後回転ヘラミガキ (内面)　回転ヘラミガキ	良好	角閃石・長石	橙色	内外面口縁部に黑斑	12
30	AⅠ区一括	土師器・坏	8.9	(3.0)	底部は平底を呈する。	(外面)　回転ヨコナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　回転ヨコナデ	良好	長石・角閃石	橙色		12
31	AⅠ区一括	土師器・坏	(9.6)	(4.3)	底部と胴部の境はやや丸みを持つ。	(外面)　ヨコナデ後ミガキ・回転ヘラケズリ後ミガキ・回転ヘラ切り離し後ミガキ (内面)　ヨコナデ後回転ヘラミガキ	良好	角閃石・長石・金雲母(微量)	橙色		12
32	AⅠ区一括	土師器・坏	(12.8) (7.9)	3.8	底部は平底で、端部が短く外反する。	(外面)　回転ヨコナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　回転ヨコナデ一部ミガキ	良好	角閃石・長石・赤色粒	橙色		12
33	AⅠ区一括	土師器・坏	(15.4)(10.0)	3.8	底部は平底で、端部が短く外反する。	(外面)　回転ヨコナデ一部ミガキ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　ヨコナデ・ナデ	良好	角閃石・長石	橙色		12
34	AⅠ区一括	土師器・坏	(12.8) 8.8	3.7	底部は平らで肩部はやや外反する。	(外面)　ヨコナデ・回転ヘラ切り離し後ナデ (内面)　ヨコナデ・ナデ	良好	角閃石・長石・赤色粒・白色粒	橙色		12
35	AⅠ区一括	土師器・高坏		(11.5)	脚部は緩やかに外反する。	(外面)　ヨコナデ・ナデ (内面)　未調整・ヨコナデ	良好	長石・角閃石・白色粒	橙色		12
36	AⅠ区一括	土師器・甕		(4.3)	底部は平らにする。	(外面)　ナデ・手持ちヘラケズリ (内面)　ナデ	良好	長石・角閃石・石英	橙色		12
37	AⅠ区一括	土師器		(8.7)	端部はやや外反し、内面に肥厚する。	(外面)　回転ヨコナデ・指オサエ・ハケ目 (内面)　回転ヨコナデ・ケズリ	良好	長石・角閃石・白色粒	明赤褐色		13
38	AⅠ区一括	土師器・甕		(13.9)	口縁部は強く外反し、端部は欠る。胴部は垂下する。	(外面)　回転ヨコナデ・指オサエ・タテ・ハケ後ナデ (内面)　回転ヨコナデ・指オサエ後ナデ	良好	長石・角閃石・白色粒	にぶい橙色		13
39	AⅠ区一括	土師器・甕	25.3	(23.5)	口縁部は強く外反し、胴部は垂下する。	(外面)　回転ヨコナデ・指オサエ後ハケ目 (内面)　回転ヨコナデ・指オサエ後ナデ	良好	角閃石・長石	にぶい褐色	外面に黑斑	13
40	AⅠ区一括	瓦質土器・鍋		(3.6)	口縁部がわずかに外反する。内面に段を有する。	(外面)　ヨコナデ・工具ナデ (内面)　ヨコナデ・ナデ	良好	角閃石・長石	(外面) にぶい黄褐色 (内面) にぶい黄橙色	外面にスス付着	13
42	BⅠ区一括	瓦質土器・火鉢		(3.3)	口縁部は直立し、端部は方形を呈する。	(外面)　ヨコナデ・スタンプ (内面)　ヨコナデ・ナデ	良好	黒色粒・白色粒	暗灰色		16

第２表　遺物観察表２　石製品　単位：cm

遺物No.	遺構番号	器種	石質	法量				掲図No.
				長さ・直径	幅	厚さ	重量(g)	
41	AIX一括	磨り石		(14.5)	15.2	7.4	2,600	13

第４章　総括

第１節　出土遺物について

三口遺跡広畑地区の調査では、弥生時代後期、古墳時代後期、古代、中世の遺物が出土している。遺構に伴うものは全体の４分の１程度であり、その多くは表土剝ぎの際の一括資料が多い。

当地区で最も古い遺物はＡ区S-1などから出土した弥生時代後期の土器片である。調査区から北西500ｍには昭和45年、甕棺など多数の遺物が出土した上万田遺跡が所在している。調査区周辺にも当該期の遺跡の広がりを予想させる資料である。

古墳時代後期の遺物は須恵器坏身や瓦が出土している。瓦は調査区の北東200ｍに県指定史跡相原廃寺が所在しており、関連を指摘しうる。ただし、相原廃寺の主要構成施設の金堂や講堂跡は、現在基壇と礎石が残る一帯と考えられている。調査区内に主要遺構などに付随する施設あるいは当該期の集落が存在したのであろうか。

古代の遺物はSK-2や調査区内から出土している。先行研究により遺物は８世紀後半～９世紀中頃とされる資料である。この時期の土師器・坏の器形変化は、口縁端部が内湾するものから次第に直線的になり、外反するというものであろう。調整は外面体部下半を回転ヘラケズリ後、回転ヘラミガキとし、上半部や内面は回転ヨコナデ後丁寧な回転ヘラミガキを施す。ミガキ間には２～６ミリ程度の空隙を有している。**29**は金属器模倣といわれるもので底部と胴部の境が不明瞭になる。それに後出する**32**などの９世紀前半～中頃の資料は、回転ヨコナデのみが主体で、回転ヘラミガキは施さないか、一部施す程度になる。調査区南の1993年度調査区からは、墨書土器を含む10世紀中頃の良好な資料が出土している。今回調査区出土資料は、それ以前のものであり、当該期の遺構が調査区周辺に展開していたことを示すものである。遺物の時期認定、各時期の調整手法など先学諸氏のご指導・ご教示をお願いする次第である。

第２節　遺構について

今回の調査で検出した遺構は、土坑や溝状遺構、性格不明遺構である。調査区による制約から遺構の全形・性格・時期は不明なものが多い。唯一、Ａ区SK-2が９世紀頃の土坑として認識できる。

中津市内の９世紀前後の遺跡は、三口遺跡から東に1.4km離れた下毛郡衙正倉跡の長者屋敷官衙遺跡がある。墳墓は調査区から南東に750ｍ離れた相原山首遺跡で方墳が構築されている。近年、諸田南遺跡で当該期の遺構が検出され、才木遺跡でも該期の遺物が出土している。現状では９世紀代の遺構・遺物の発見例は少ない。今後、沖代条里を経営した集落、郷衙クラスの遺構の発見を期待したい。

今回、調査区周辺に当該期の遺跡の広がりを想定させる資料を得たことは、当時の集落動態を調査・研究する上で貴重な成果となった。

以上、三口遺跡広畑地区の発掘調査成果とその意義を述べ、総括とする。

写　真　図　版

A 区調査区全景（東から）

SK-1 完掘状況（南から）

S-1 完掘状況（西から）

SK-2 土層（北から）

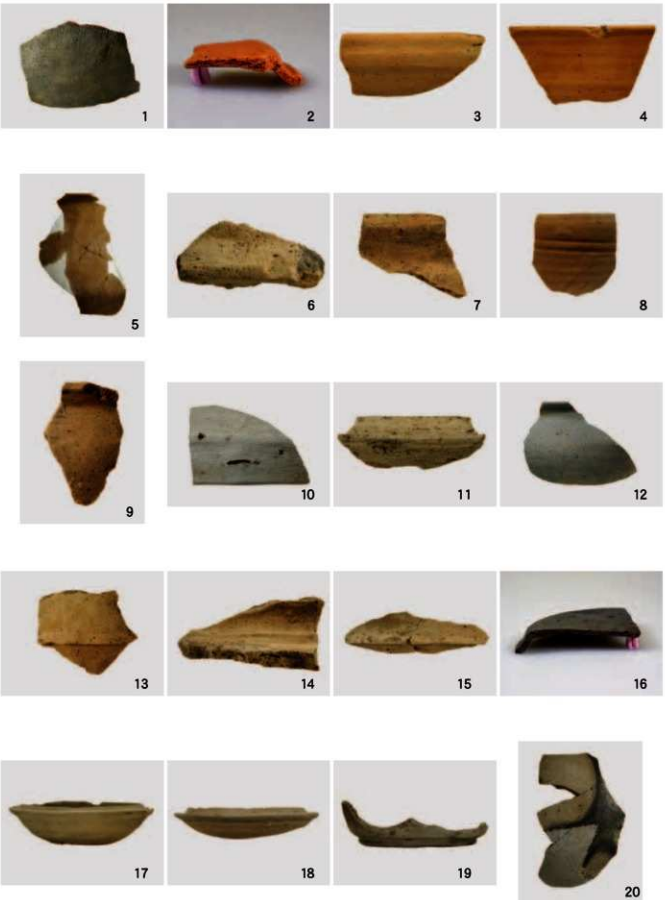
S-2 完掘状況（南から）

写真図版 2

B 区調査区全景（西から）

南壁土層

S-2 完掘状況（東から）



出土遺物

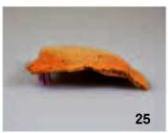
写真図版 4

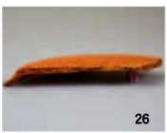
21

22

23

24


25


26

27

28

29

30

31

32

33

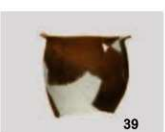
34

35

36

37

38


39

40

41

42

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みくちいせきひろはたちく
書　　名	三口遺跡広畑地区
副 書 名	遊技場増築・立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告
シリーズ番号	第61集
編 集 者 名	浦井　直幸
編 集 機 関	中津市教育委員会
所　在　地	〒871-8501　大分県中津市豊田町14番地3　TEL 0979-22-1111
発 行 年 月 日	2013年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三口遺跡（みくちいせき）	大分県中津市大字相原（おおあざあいはら）3334番地	44203	203041	33°34′08″	131°11′26″	20101004～20101019	142㎡	遊技場増築・立体駐車場建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三口遺跡	集落	弥生・古墳・古代	土坑・溝状遺構	須恵器・土師器	9世紀前後の遺構・遺物を検出

要約	調査区から弥生時代後期、古墳時代後期、古代の遺構・遺物を検出した。古代の遺物は9世紀前後のもので、当該期の集落動態を調査・研究する貴重な資料を得た。

三　口　遺　跡
広畑地区

遊技場増築・立体駐車場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告　第61集

2013年３月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　㈱川原田印刷社